HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | 芒亭書屋談叢 |
| Author(s) | 芒亭 |
| Citation | 各務時報, 95 |
| Issue Date | 1936-11-30 |
| Doc URL | http://hdl.handle.net/2115/77666 |
| Type | column |
| File Information | A018_02_03all_Part30.pdf |

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

# 芒亭書屋談叢

## 十一月

俳人芭蕉の「奥の細道」に見る樣な旅の爲の旅は、今の私には望んでも出來ない事である。私は此數年來よく旅に出掛けては居るが、其は大抵調査研究の目的の爲で隨分忙しい旅であるけれども旅で詠んだ歌も幾らかはあり、旅で見た忘れ得ない人々も無いではない。

何年か前の丁度今頃十一月も半ば過ぎた頃東北の各地を旅行した事がある。朝の内の小雨が午後から風を伴つて雪となり村を見て歩くのに隨分困つた事が幾日もあつた。

或る日私は秋田の或る山村で調査を終へた後で、小學校の教員室の大きな火鉢を圍んで大勢の先生達と話に花を咲かせながら夕方の五時頃のバスを待つて居た。バスを止める爲にひどい吹雪の中に小使が校門の前に立たされて居た。五時過ぎになつても小使が何とも云つて來ないので、樣子を見に行つた先生が雪で眞白くなつて歸つて來て云はれるには「小使がきつとバスを見失つたんですよ。ひどい吹風ですからねえ。然し吹雪の爲に今日は時間が不定なのかも知れません。うんと注意しとく樣に云つて來ました。」

もうすつかり暗黑となつた窓の外には風と雪とがおどり狂つて居た。此邊には電話もなければ飯を食ふ樣なところもない。幸に先生達も皆話に興味を感じて居たので、時間がたつのは早かつたが、それでも小使が教員室に飛び込んで來たまでには相當の時間があつた。小使は隨分興奮して今バスを止めたと云つた。全身眞白くなつて手でこすつた顏の一部分が赤く濡れてそこから湯氣が立ち昇つて居た。私は何と云つて感謝してよいか分らなかつた。興奮に輝いて居たあの目私は今もあの目を忘れる事が出來ない。

どんな小さな職分にも、それ〳〵精一杯の努力がいる。山奥の岩蔭に咲く名もない草花のどの一つも、一生懸命に咲いてゐるのと同じ樣に。そしてどんなに小さく見える生命にも創作の喜びもある。その努力を無視し其感激を輕んずる事は恐るべき事である。

私の旅は調査の旅ではあるが、もつと多く人生修道の旅であるかも知れぬ。

私は深く興味を感ずるが故に調査もし學問もして居るが、私は學問をする機械にはなりたくない。貧しいながら私の魂の本營にも學問よりもつと尊い仕事もあるからである。（芒亭）